

宇治十帖結末部の方法と思想

— いわゆる浮舟の還俗問題を中心に —

武原弘

宇治十帖の結末部における僧都の手紙が浮舟に還俗を勧告しているかどうかの問題をめぐって、是非論がたたかわされているが、近時、門前真一氏⁽¹⁾や多屋頼俊氏⁽²⁾の否定説再論がなされて、論争はいっそう深刻化していると言つてもよい。還俗勧告是非論は、さらに、浮舟の還俗非還俗の問題をも内在させており、問題の根は複雑でしかも深い。

僧都の手紙文の解釈がつまるところ中心問題であることはもちろんで、既に諸説がみられるが、論争の過程を通して問題点は明確になり大きな成果をもたらしつつも、両説は全く平行線を辿つてきており、さらに豊かな結末へと論争が発展的に継承されるためにはなお大きな困難が予想されるとも言えるであろう。問題は宇治十帖の結末のみならず源氏物語全篇の主題論にも関わる問題であるので、やはり避けるべからざる重要問題である。

私はこの問題を浮舟物語の形象化過程の視野の中に置き直して再検討したい。そして、宇治十帖における橋姫物語と浮舟物語の関連性を注目し、ここで作者が用いた方法を分析し、その中心に浮舟還俗の問題を設定して考察することにした。

宇治十帖結末部の方法と思想 — いわゆる浮舟の還俗問題を中心に —

結論的には、私は還俗勧告説をとり、浮舟の還俗是非については非還俗の立場を支持する。殆ど通説のままで、私が新たに小考を述べる要はないとも思うのだが、ただ浮舟が最終的に出家をめざして生きる姿を作者自身がどう考えていたかの点についていささか関心を抱いているので、小稿をつづることにする。

(一)

まず、横川の僧都の手紙が浮舟に還俗を勧めたものかどうかについて、手紙文自体からでなく、それに至るまでの物語形象の深化過程——主として手習巻の叙述を中心に——から考察したい。問題の手紙文が物語叙述の中でどのように形象化され必然化されているかを見ることも等閑に付されてはならない。

手習巻頭から、浮舟還俗の問題（正確には浮舟に対する還俗勧告の事象）は、既に作者の構想にあったのではないかと私は考える。このことを証明する叙述を、次の諸点にわたって指摘することができる。

まず、横川の僧都の人間像について。しばしば指摘されるように、僧都は物語中の他の宗教者に比べきわめて異質な人間像として描かれている。一面においてきびしい仏教者であると同時に、他面においてきわめて人間味の豊かな自由な精神の持ち主として造型されている。例えば、僧都は最初から母や妹を伴なって登場し、母の危篤の報に接すれば直ちに下山看病に赴くのであるが、かつて八宮の死骸にさえ会わせないで大君や中君を悲しませた阿闍梨（椎本）に比べると、その異質性はよくわかる。殆ど瀕死の状態で倒れていた浮舟を救助しようとするとき、「池に泳ぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて、死なむとするを見て、助けざらむは、いと、悲しかるべし。人の命、久しかるまじき物なれど、残りの命、一二日をも惜しまずば、あるべからず」（手習）「我、無慚の法師にて、忌む事の中に、破る戒は多からめど、女の筋につけて、まだ、誇り取らず、過つ事なし。齡六十にあまりにて、今更に、人のもどき負はむは、さるべきにこそはあらめ」（同）と言っているが、この言葉に示される僧都の人間像が、当時においていかに異質異様なものであったかは、これを非難する周囲の弟子僧の言動の描写を見てもよくわかる。

このような僧都を評して、「人間主義者」（佐山濟氏）「近代的意味でも、筋の通ったヒューマニズムの具現者」（丸山キヨ子氏）「当時の仏教的思想ないし教理からはみ出そうとする変革者」（広川勝美氏）などと強調することも不当ではあるまい。僧都をここで直ちに中世の法然・親鸞と直結してしまうことは、門前氏の説かれるごとく、確かに行き過ぎであろう。氏は反論して、源氏物語の基

調となつている、また当時の社会に一般的であったところの仏教思想は源信（僧都のモデルに擬せられている）以前の天台聖道門による自力修行肯定の立場のもの、と説かれているが、日本仏教思想史上、当時新しい浄土教理も徐々に社会に浸透しつつあったことも指摘されており、進歩的教理を宣べた源信の思想と横川の僧都の思想の接近類似について仲田庸幸氏の詳細な論考もあるので、その先駆としての僧都の革新性は首肯されることである。

このような僧都が浮舟に対して還俗を勧告する可能性は十分あるわけである。むしろそのことのために僧都の人間像がこのような造型されたときえ考えられるのである。

次に、浮舟を出家させた時点およびそれ以後の僧都の心理の動揺・推移を見たい。

浮舟が出家を申し出た時、僧都は「まだ、いと、行く先遠げなる御程に、いかでか、ひたみちに、しかは、思ひしたむ。かへりて、罪あることなり。思ひ立ちて、心を起し給ふ程は、強く思せど、年月経れば、女の御身といふ物、いと怠々しきものになむ」（手習）と言ひ、授戒直後「かゝる御かたち、やつし給ひて、悔い給ふな」とも言っている。若い美貌の女浮舟の出家を危惧する気持があったことを示している。勿論、江溯文世氏の説かれる女人罪因観の現われでもある。この叙述は、後で薫が浮舟の生存を知り、彼女に会わせるようにと僧都に迫る場面で、僧都が「髪・鬘を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあり。まして、女の御身といふ物は、いかでかあらん。いとほしう、罪得べきわざにもあるべきかなと、あぢきなく、心乱れぬ」（夢浮橋）と狼狽する心理の描写と全く一致してい

る。僧都の狼狽の原因が問題であるが、顧みて、薫に会ってからの僧都の動揺する心理は刻明に反復して描かれているのである。「さればよ。たゞ人と見えざりし、人の様ぞかし。かくまで、のたまふは、軽々しくは思はれざりける人にこそあめれと、思ふに、法師といひながら、心もなく、たちまちに、かたちをやつしてける事と、胸つぶれて、答へ聞へんやう、思ひまはさる」(夢浮橋)「かく、おぼしけることを、この世にはなき人と同じやうに、なしたることと、あやまちしたる心地して、罪深ければ……」(同)

僧都の当惑狼狽の原因は、文脈からみて、明らかに浮舟を出家させた自分の軽率さ・過失を後悔している心情に由来している。同時にまた、薫の高貴な身分に対する恐縮遠慮が含まれていたことも認めてよい。これらの叙述に密着して例の手紙があり、そこに「御ざし深かりける、御中を、そむき給ひて、怪しき山賤の中に、過ごし(別本は出家しとある)給へること、かへりては、仏の責め、添ふべき事なるをなん……」(夢浮橋)と述べてあるその文脈を辿るならば、僧都の狼狽悔過の情が次第に高潮し還俗の勧告に至つたと読むのが妥当であろう。なお、多屋氏は、出家に際しての手続き上の手落ち——夫である薫の聽許を得ないまま浮舟を出家させたこと——が事実あったとしても、そのために出家・授戒を取り消すことなどあり得ない、あつてはならないと説いておられるが、僧都の狼狽が、単に授戒の手続きに関する薫との問答における、場面心理の機微のみであるとすれば、僧都の思想的立場や人間像の問題にその描写は本質的な関わりをもたないことになり、きわめて意味の軽い描写として把握されたことになる。作者がこれほど精確に僧都の動

揺する心理を描き重ねていることを思えば、また、その叙述に「罪」という語がくり返されている点を見れば、ここにはより重い意図がこめられていると見るべきで、私が既述した僧都の人間像に、より深く関わる叙述であると思わなくてはなるまい。即ち、僧都の心理描写は、すぐれて彼の思想内容や浮舟の還俗問題に対して関わりをもち、その積極的伏線描写となり得ていると考えたい。

さらに注目すべき伏線描写として、浮舟の周囲にあつて彼女の出家を極度に悲しむ女たちの描写があげられる。

僧都の母少将尼は「あな、浅ましや。など、かく、奥なきわざは、せさせ給ふ」(手習)「今は限りと、思ひ果てられて、いと、悲しきわざに侍る」(同)と悲歎にくれ、妹尼は「残り多かる御身を、いかで、経給はんとすらん」(同)「いと、物はかなくこそおけしける、御心なれ」(同)と、「臥し転びつゝ、いと、いみじげに」泣き惑っている。女房たちは「口惜しきわざかな」(同)と惜しみ、かつは僧都を恨み誘ふ有様である。若い美貌の浮舟の出家は確かに悲しい事柄に属する。また、これらの描写が累積されることによつて浮舟の美しい姿が対照的に生彩を放つことの効果を、作者は計算ずみであろう。ただ、同時にまた、浮舟の出家がその内部において調和し難い異常事態を孕んでいることを示唆し、また、出家後の浮舟の歩む道が平穩無事でないことをもそれは暗示していると考えられるのではなからうか。読者は既に浮舟出家の真意を熟知している。浮舟の前にやがて薫か匂宮かが出現するであろうことは容易に想像される。それは浮舟にとって一つの危機である。物語はその危機に向つて浮舟の悲劇性を集中化し、その頂点は僧都の還俗勧告

の場面にあるのだが、右に見た尼や女房の悲歎は、それらの悲劇的場面の造成の補強的描写であると、私は考えたい。即ち、尼や女房たちは浮舟を出家から現実へ復帰させようとする要因となり、その伏線人物として機能しているものと見るのである。浮舟還俗の問題がここですでに作者の構想の中にあつたと考える所以である。

浮舟と薫の再会（従つて僧都の還俗勧告）が既に手習巻から構想されていたと私が考える今一つの根拠は次の点である。

浮舟出家の直後、物語は僧都と明石中宮の雨夜の物語へと展開する。僧都はその夜浮舟発見の次第を中宮に語る。明石中宮と薫の間柄を見ても、浮舟生存の事実が薫の耳に達するまで物語は多くの描写を必要としないことは、容易に納得できる。

また、作者は紀の守なる人物を登場させ、浮舟の耳に聞える場面の中で彼に薫の近況を語らせている。その描写は巧みで、薫に対する浮舟の慕情を強烈にかきたてるように描かれ、「昨日も、いと、ふびんに待りしかな。川近き所にて、水を覗かせ給ひて、いみじく、泣き給ひき。上にのぼり給ひて、柱に書きつけ給ひし、

見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ深ハとどせきあへずとなん、待りし」（手習）というように、抒情的な表現の世界で浮舟を包んでいく。物語は急テンポに薫と浮舟の再会へと展開されていくかの如くである。

以上、四つの点から浮舟還俗問題の構想化、伏線化の叙述を追つてみたのだが、これらが僧都の浮舟に対する還俗勧告説にとつて有利であることは言うまでもない。さらに、これらの叙述は、単に手法や描写法の問題にとどまるのではないことこそ重要なのであつて、

その重層した表現の裡に、作者は、浮舟の世界の外にあつてそれと対峙しながらしかも浮舟の内部に深く侵入しようとするもう一つの世界を造成しようとしているのである。一見、浮舟と同質同次元の世界に棲んでいるかのように思われる僧都さえも、実は浮舟の外にある別次元の世界にあり、両者の行き交うその交点に、僧都の手紙が位置づけられるものである。この点については後で再び触れたい。

なお、勧告否定説は、薫と浮舟との再会の案内を依頼された僧都がそれを断わっている点を反証として指摘するが、自ら下山同行することは僧都としてさすがに躊躇するところもあつたのであり、薫や浮舟に対する深い思いやりから手紙を書くことにしたと考えて、問題はないであらう。

(二)

「今朝、こゝに、大将殿の物し給ひて、御有様、たづね問ひ給ふに、初めより、ありしやう、くはしく、聞え侍りぬ。御心ざし深かりける、御中を、そむき給ひて、怪しき山賤の中に、過ごし給へること。かへりては、仏の責め、添ふべき事なるをなん、うけたまはり、驚き侍る。いかゞはせむ。もとの御契、過ち給はで、愛執の罪を晴るかし聞え給ひて、一日の出家の功德、はかりなき物なれば、なほ、たのませ給へとなむ。ことくには、身づから、さぶらひて、申し侍らん。かつく、この小君、聞え給ひてむ」と、書いたり、紛ふべくもあらず、書き明らかめ給へれど、異人は、心も得ず。（夢浮橋）

僧都の手紙の全文であるが、最も問題となるのは「もとの御契……たのませ給へ」の部分である。この内容が還俗勧告であるかどうか、両説は平行線のまま諸々の解釈を生んできた。既に諸説を整理してこの論争の争点と成果をわかりやすく解説したものもあり、私などの拙い紹介は不必要なので、今は結論的に岡崎義恵氏の所説⁽⁹⁾を引用させていただくにとどめ、論点を他に移しつつ立論したい。岡崎氏は、問題となる主要な点を三つとりあげ各々について還俗説による解釈と否定説による解釈を示し、後者を批判しながら「右の問題は、僧都の文の後半『いかがはせむ』以下についてのことであるが、前半からの文脈の続き工合からいうと、僧都の後悔の情と当惑の感とを述べてから、後半にかかるのであるから、還俗説による方が自然である。」と述べておられる。私が前節でみたとおり、手習巻から大局的に把握することによっても、氏の所論は妥当なものであると思う。還俗勧告説による重松信弘氏の批判⁽¹⁰⁾（門前真一氏や多屋頼氏の説に対する）にも、ほぼ全面的に従いたい。

ところで、私が問題にしたいのはむしろその次の部分「ことごとくには……」以下の周辺部についてである。

門前真一氏が肯定説を強く否定される根拠としてあげられた僧都の手紙の周辺の問題点は、第一に、この手紙はあまりに簡単すぎて還俗勧告というような重大な内容をもつものとは考えられないこと。第二に、この手紙を浮舟は殆ど読まないまま内容を察知している様子だが、これまた、還俗勧告という重大な革新的なことがそれほど簡単に理解されるはずがないという点。さらに第三に、僧都の勧告を浮舟が拒否するということは宇治十帖のテーマから考えて

宇治十帖結末部の方法と思想 — いわゆる浮舟の還俗問題を中心に —

あつてはならないことで、仮にそうであれば作者の理念の混乱を示すことになるということ、などの諸点であった。⁽¹¹⁾

還俗勧告説から右の諸点はどう考えられるべきであろうか。門前氏説への反論がここでの目的ではないが、ここに浮舟物語の構想や主題を解く重要な手がかりもあると思うので、全体的な視野からこれを私の問題にしたい。

この手紙がいささか簡単にすぎるのは、氏も指摘の通り、これが作品の中の手紙であるからであり、また、手紙の中に「ことごとくには、身づから、さぶらひて、申し侍らん」と直接面談を約しているからである。

僧都はこの手紙に先んじる第一の手紙で、「昨夜、大将殿の御使にて、小君や、まうで給へりし。事の心、うけ給はりしに、あぢきなく、かへりて、臆し侍りてなんと、ひめ君に聞え給へ」(夢浮橋)と書いている。浮舟は薫と僧都とが既に会って語り合っていることを知らされているのであるから、この第二の手紙がどのような主旨のものか大体的見当はつくのである。これが物語の手法として自然であり、かつ効果的であることは容易に認められる。

また、「ことごとくには……」と言って再会を予告しながら、僧都が浮舟に再会面談する場面が、物語の末尾に至るまで遂に描かれていない問題については、古くからの源氏物語中絶説と擱筆説の論争も絡んでくるが、確証はないので性急に結論を望むべくもない。私は一応、岡一男氏の説に従って、僧都は還俗を勧告しているが浮舟はそれに従わないであろう(浮舟非還俗説)と考えているが、いま仮に中絶説の立場に立って、本来ならば僧都と浮舟の再会の場面が描写

されるはずになっていたと考えるとしても、浮舟の仏道心はもはや不動のものであったであろうから、その描写は、無用なくり返ししかない。ここではやはり擱筆説が正当と思われ、従って僧都と浮舟の再会の場面は作者の意図的な省略とみたい。門前氏はそれを「重要記事の限度を越えた省略、脱落」と言われるが、手紙文中の「一日の出家の功德……」が一応理を踏まえた還俗後の救いについての記事とみれば、納得のゆくところである。

私は、これらの問題点を視野に置きつつ、この手紙に対する浮舟の無関心な態度に注意したいのだが、浮舟はなぜそのような態度に出るのであるか。

浮舟は殆ど手続を読んでいない。さらに、手紙の使者小君に対してもきわめて冷淡な態度であること、薫の手紙に対しては「今日はなほ、もてまゐり給ひね。所違へにもあらむに、いと、かたはら痛かるべし」（夢浮橋）と言って返事を書くことさえしない。要するに、出家後の浮舟は、身辺に迫るものごとごとく徹底的に拒否しているのである。この浮舟の拒否の態度は、出家入道に対する堅固な意志の現われであることは確かである。「今更に、かゝる人にも、ありとは、知られで、やみなん」（同）「この僧都の、のたまへる人などには、更に、『あり』と、知られたてまつらじ」（同）と、今は現世の一切の絆から分離し、一途に出家を完うせんとする浮舟なのである。

私は浮舟のこのような態度を読みとることによって、彼女は僧都の手紙が薫との復縁を勧めているものであることを察知していたこと、さらにそれを承知の上で彼女は徹頭徹尾それを拒否する決心で

あったと判断する。手紙などはじめから読む必要がなかったのである。

浮舟によって僧都が拒否されることが、この物語における作者の理念の混乱を示すことになるであろうか。

いささか大胆に過ぎる言いかただが、私見によれば、僧都の還俗勧告も当然なことであったが、同様に浮舟の勧告拒否もまた当然なことであったと思うのである。還俗を勧告することによって僧都は真に僧都たり得、それを拒否することによって浮舟は真に浮舟たり得、物語はここではじめて統一した世界像を完結し得たのだと言い換えてもよい。

僧都が浮舟を出家させた時、僧都は浮舟出家切願の真意を真実に理解していなかった。このことは僧都の重大な誤謬である。就中、浮舟をめぐる薫と匂宮との争いについて不問のまま出家させたことの誤りはあくまでも重大である。僧都が浮舟を出家させる直接の動機は浮舟にとりついている物怪の調伏退散であり、「とまれかくまれ」浮舟の意志は固いから、という事情によっている。物怪の言ひ散らした「昔は、行ひせし法師の、いさゝかなる、世に恨みをとゞめて、漂ひありきし程……」（手習）、「いと、清げなる男の、よりきて、いざ給へ、おのがもとへと言ひて、抱く心地のせしを……」（同）などの言葉は、悲運の八宮を父とする浮舟が匂宮の情欲に身悶えて狂った「宿世」の深淵の総体を的確に物語っていたのだが、僧都はその「宿世」をどれほど理解し得たのであろうか、甚だ疑問と言わざるを得ない。

僧都は浮舟に還俗を勧め、二重の過ちを犯している。何故なら、

薫と浮舟の関係については詳しい事情を知り得ても句旨と浮舟との過去については何も知らないからである。浮舟の問題について僧都は本質的には何も知っていないことになる。その無知無慮の上になり立った出家授戒が過失であると同様、その還俗勧告も誤謬であることを避けることはできない。還俗勧告において、教理に基いた懇切な説得がみられないのもそのためである。

しかし、このように述べたからとて、私は前節で述べたような僧都の人間像を訂正しようとは少しも考えない。僧都はやはり人間味豊かな高德の僧であることをやめほしくない。何故なら、浮舟が終始一貫して自己の素姓や過去について懺悔しない以上、物語の論理上、僧都の過失や誤謬は当然の帰結であるからである。僧都の人格像からみて、浮舟の救助、出家、還俗勧告など僧都の一連の行為やそこに描かれる彼の心情は、彼にふさわしいものであり全的に同意承認されるからである。そこに仏教の教理的根柢もあることは確認されなくてはならないが、それは「一日の出家の功德……」に示されており、これが出家を強調する出典に基づくものであったとしても、それ程尊い出家を果した浮舟の還俗は、なおさら救いを保障されるはずのものであったということになる。

僧都の還俗勧告は、自分の軽率な過失を償う方法としてとられた処置であったと同時に、浮舟に対する深い人間的愛情の発露でもあった。還俗は確かに罪深いことではあるが、それを敢えて犯しても浮舟が薫の愛執に妨げられたまま仏門にあることの罪深かきから彼女を解放してやらなければならなかったのである。丸山キヨ子氏の説かれるように、それは「愛執に処して愛執を超える」道であった。⁶⁸⁾

宇治十帖結末部の方法と思想　— いわゆる浮舟の還俗問題を中心に —

しかしまた、還俗は浮舟を出家の世界から現実の人間の世界に引き戻すことを意味する。浮舟にとって、それは耐えられることではない。彼女の僧都拒否もその意味において当然なことでもあった。

宗教的救済への志向とその挫折——浮舟もまた、宇治十帖が一貫して問い続けてきたこの命題との対決を余儀なくさせられている。

この場合、僧都の手紙に、「愛執の罪、還俗の罪を犯してなは救済の希望をかける論理が求められてない」として、僧都自身解決できなかった難問題についてそれを浮舟が解決できるはずもなく、「なすべき方途もなくうち臥す浮舟の姿」こそ源氏物語の到達点を象徴するもの、と小野村洋子氏は説いておられる。重松氏は「還俗は一応は、浮舟を救済の約束のない愛欲の世界に放り出すような形ではあるが、この物語に流れている出離の思想からみて、浮舟には救済の手が、ひそかに用意されているとみてよい」と説かれる。⁶⁹⁾ いずれも傾聴すべき意見であるが、私は、僧都の役割は、浮舟に還俗を勧める手紙を書いたところでその全てを完了していると考ええる。浮舟の強固な出離の意志を、その根柢から引き揺るがそうとする僧都の勧告は、この巻で浮舟に宛てられた薫の手紙の世界と同質同等のものとして機能していると思われまいか。思うに、物語の中心人物は浮舟であり、僧都でさえも所詮は脇役である。僧都は、浮舟の周囲で彼女を出家の世界からやゝもすれば現実へ連れ戻そうとする他の諸々の人物の中の一人であってよく、それ以上ではあり得ない。浮舟の悲劇性を形象化するための、単なる狂言廻しと言えは言い過ぎであろうが、少なくとも、浮舟に優先する役割にはない得ていないはずである。作者は正確に浮舟の世界を深化させる。

聖なる仏道の世界をめざしつつもなお現実の矛盾・迷妄から完全に解放されることのない人間の姿が、浮舟像の深化過程の裡に、執拗に追跡される。自らの宿命の内部に棲む根源的矛盾、人間性そのものの根本に息づくあるデモ・ニッシュなものの（蟄居中の浮舟の心に浮かぶ匂宮）……これら浮舟の生をその根底からゆり動かし様々のものと対決して、これから浮舟はひたすらに出家の道を歩まねばならぬ。

宗教的救済の世界と人間的罪障の世界の対立——浮舟はその間に生身を置いて苦悩して生きているのである。ここでもまた、宇治十帖の作者は二者対照法を有効な方法として用いており、それは以前の橋姫物語にみられたものと殆ど変っていない。

僧都の役割は、このような方法による宇治十帖の世界像の範囲内で把握されなくてはならない。僧都は恐らく、このような作者の主題追求において、最も有効な人物造型の達成であった。

(三)

浮舟が、僧都の手紙を読まず、弟小君にも会おうとせず、薫の手紙さえも拒んでいる態度は、頑固な感じであるが、それはまた、仏道への強固な意志の現われでもあった。このような浮舟の態度は、既に早くから見られたことで、例えば、蘇生後の浮舟が何度尋ねられても我が身の素姓や過去を黙秘する条、中将（妹尼の娘婿）の熱心な懇想にも靡かず「ひたぶるに、なき者と、人に、見聞き捨てられても、やみなばや」（手習）「すべて、松木などのやうにて、人に見捨てられて、やみなむ」（同）と中将を拒絶する条あたりに

も明瞭であった。

しかし、こういう浮舟の姿は本来彼女自身のものではなかった。浮舟巻末で入水を決意するまでの彼女は、無意思的で、外界に対する拒絶反応を示したこともなく、秋山虔氏も説かれるように「なされるがまま、運命に翻弄されつづけた」のであったが、入水そして蘇生した浮舟は「生きながら地獄をくぐりぬけることにより、いま念仏にいそしみ手習に思いを清ます主体的行為者としてよみがえった」のである。浮舟の入水を境とするこの変身ぶりは諸氏の等しく指摘されるのであるが、例えば松村誠一氏が浮舟の「らうたさ」と「心強さ」に視点を置いて分析されているのは示唆深い。私は浮舟の「心強さ」あるいは「主体的行為者」を、彼女が中将や尼をはじめ僧都や薫などに示す拒否の態度において見ることができるのである。

ところで、外界からの刺激に対する浮舟の頑強な拒絶反応は、当然、かつての大君の姿を確実に想起させる。（緑色）大君は、仏道欣求のあまり薫の求愛すらも拒みつつ、清らかに死んだ。浮舟もまた薫との再会を拒みひたすら出家の道に励む。彼女の道心はもはや動くことはあるまい。ここに至って浮舟の世界は大君の世界ときわめて近似してくるのである。

宇治十帖における橋姫物語と浮舟物語の関連性ないし統一性の問題については、本誌前号に触れているので、⁽⁶⁸⁾ここでは詳述しないが、作者がこの物語にかけた文学的営為には、一貫して、人間性の根源にまでさかのぼってみた人間の罪障深い宿世とそこからの人間浄化・救済の問題が、探求され続けていることが確実である。そ

れも、主人公の薫においてであるよりもむしろ大君や浮舟などの女性人物においてである。

確かに橋姫物語の方法と浮舟物語の方法とは同一ではない。大君は現世拒否の観念を出発点としその故の苦悩を背負ったのだが、浮舟は現世体験の肯定から出発して苦悩し現世拒否の思想に到達したのであって、両者はいわば同一世界の往相と還相の軌跡を描いたのである。しかし、両者の生を深く刻んだ苦悩のいちいち、女であることの、しかも当時の時代社会の背景をもつ具体的な貴族生活者としての女であることの、ぬきざしならぬ情況に発した苦悶の声でもあった。大君が拒絶し浮舟もまた拒否した当のものは、実は人間性そのものの内部に潜む罪であつたし、またすぐれて当時の頹廢した貴族社会であつた。浮舟の拒絶の姿勢が、「とりもなおさず作者が物語の世界を通して到達したところの、貴族社会に対する批判的姿勢であつた」とは秋山虔氏のいみじくも説かれたところである。

ところで、浮舟の態度からみて、今後彼女がひたすら出家修行に励んでいくであろうことは、諸氏の殆ど一致して説くところである。岡一男氏は「その道心はもはや動くことはあるまい」と述べ、秋山氏は「今後の予断も許されないのではあるが、彼女は確実に現世厭離の道を行んでいるといえる。その歩みに内在する根深い葛藤も、それが試練となつて、彼女は救済されていくのではないだろうか。」と述べておられる。重松氏も「(仮に)浮舟が還俗したとしても、既に一度出家したことでもあり、その晩年愛執がなくなつてから、出家するということは、十分期待できる」と述べられる。他に同旨の論は多い。

宇治十帖結末部の方法と思想　— いわゆる浮舟の還俗問題を中心に —

ただ、よく問題になるのは、この終末の場面で浮舟の心情に動揺が見られることである。薫の手紙の使者小君を見て「いと、悲しくて、ほろ／＼と、泣かれぬ」(夢浮橋)浮舟であつたし、薫の手紙に接して「さすがに、うち泣きて、ひれ臥し給へれば」(同)と、涙する浮舟である。この描写から直ちに、浮舟の道心が揺らぎ彼女は還俗して薫と夫婦になるであろうとする説や、ここまで書いてきた作者自身の思惟構想の限界のあらわれを見るとする説などを私は肯定できない。が、作者がこれまでに丹念に描いてきたものが、出家への真摯な意志を固めようとする浮舟とそれを妨害する外的な様々な誘惑であつたことを思えば、最終の場面でその両者の板ばさみに煩悶し涙する浮舟の姿は注視さるべき一点ではある。

この場面での浮舟の悲痛な心情は哀感切々たる物語情緒「物のあはれ」となつて反映し、文芸的にも効果的であるが、それを単に文芸美としての「物のあはれ」と見るのみならず、もつと積極的に評価したいのが私の考えである。

作者は悲壮かつ真摯な決意で浮舟を出家に向かわせた。しかし、いろいろな障害や誘惑がそこには待ちうけていた。僧都や薫は、浮舟に外から迫る障害や誘惑の典型として描かれた。浮舟の道は必ずしも平坦ではない。浮舟が生身の人間である以上、超越することができないものが、出家への志向を強くする彼女を苦悶させる。浮舟は確かに出家への意志を固くしているとは言え、人情を完全に脱却して仏道に徹するまでには、そこに無量無限の苦悩があることを、物語の終末は暗示するかの如くである。そして、それこそがまさに作者の書きたかった人間の姿なのであり、あるいはそれが、作者自

身の仏道への志向と人間の現実への執着に悩んだ精神的苦悩の全体であったかも知れない。

私は、浮舟が還俗するであろうとは思わない。同時にまた、浮舟の出家の道が何の挫折もなく完遂されるとも考えない。宗教的救済への志向と人間の現実への執着と、この両者は永遠に対立相剋し続けるものであろう。源氏物語の方法とは、この対立相剋する両局を人物や事件を通してどのように形象化・典型化するかということであり、思想とは、このような分裂の危機に瀕してなおも人間らしく生きようとする魂が社会的現実との関わりの中でどのような苦悩を経験するかを表現するものである。

作者にとつて、人間の宗教による救済は常に理想として志向されながらも、その対立位相として現われる人間性の諸々の矛盾や挫折を、捨象し去ることが遂にできなかったためであらう。それは、作者の思惟の限界ではない。恐らく人間現実の積極的肯定であり、それを否定してしまう当時の仏教への懷疑であったものと思われる。彼女の日記にはそのことを証する文章が確かに見られるのである。

結局、夢浮橋巻の巻末に至つてなおも、浮舟の救済の問題は未解決のまま残されていると言わなくてはなるまい。ただ、そこで終わっている源氏物語がそれ以後どのように書かれるはずであったとか、僧都の邊俗勧告の教理的根拠があるかないかについて考察することのほかに、われわれがさらに重視しなければならないことは、矛盾と挫折の中でじつと身を保ちながらいかに生きべきかを求め続けていく浮舟の姿そのものであり、さらに言えば、その浮舟を創造

することによつて作者がわれわれに提示し問いかける何か、ではあるまいか。

私は、仏教的救済に専心する浮舟に対して、仮に救いもたらされるとしても、その浮舟を凝視する作者には、救いよりはむしろ悲哀と絶望さえもが心底深く隠され続けていったのではないかと思うのだが、詳考は次の機会にゆずりたい。

注(1) 「浮舟の救ひの問題―還俗勧告の教理的根拠は果してあるか―」(『天理文学季報』昭43・3)

(2) 「浮舟と横川の僧都」(『文学』昭43・11)

(3) 佐山清氏「横川の僧都―その人間主義について―」(『日本文学』昭31・9)、丸山キヨ子氏「源氏物語における仏教的要素(その一)―横川の僧都について―」(『東京女子大』『日本文学』昭38・10)、広川勝美氏「浮舟の救い―その課題と横川僧都の役割―」(『日本文学』昭39・3)などが代表的。

(4) 三氏いずれも注(3)にあるものに拠る。

(5) 注(1)に拠る。

(6) 「源氏物語の文芸的研究」(『風間書房』昭37・9)の第四章第三節に拠る。他に井上光貞氏「藤原時代の浄土教」(『歴史学研究』昭23・1)、田村円澄氏「浄土思想と求道心」(『解釈と鑑賞』昭34・4)、村田昇氏「日本古典の仏教的精神」(『橋書房』昭33・12)等参照。

(7) 注(2)に拠る。

- (8) 「中古文学の研究について」(上坂信男氏「文学・語学」第五十一号、昭44・3)が最近時のものであるが、他に門前真一氏「源氏物語新見」(昭41・3)、重松信弘氏「源氏物語の救済について」(梅光女学院大学「国文学研究」第一号、昭40・11)等、注(9)も参照できる。
- (9) 「源氏物語の宗教的精神」(「日本学士院紀要、第二十三卷第三号、昭40・11」)
- (10) 注(8)の中の重松氏の論文に拠る。
- (11) 注(1)に拠る。
- (12) 「源氏物語の基礎的研究」(東京堂、昭41・8)
- (13) 注(3)の中の丸山氏の論文に拠る。
- (14) 「源氏物語における「宿世」の深化」(「兄弟」昭39・7)
- (15) 注(8)の重松氏の論文に拠る。
- (16) 「源氏物語」(岩波新書、昭43・1)
- (17) 「浮舟」「うたさ」と「心強さ」(「成蹊国文」第一号、昭43・1)
- (18) 拙稿「宇治十帖研究序説」(梅光女学院大学「国文学研究」第四号、昭43・11)
- (19) 「浮舟をめぐるの試論」(東大出版「源氏物語の世界」所収、昭39・12)
- (20) 注(12)に拠る。
- (21) 注(16)に拠る。
- (22) 注(8)に拠る。
- (23) 中村良作氏「夢の浮橋結末論」(「国語・国文」昭18・7)

(24) 注(14)の小野村洋子氏の論文に拠る。
 (25) 注(8)の重松信弘氏の論文に拠る。
 (26) いかで、いまはなほ物忘れしなむ、思ひがひもなし、罪もふかかりなど、明けたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。(紫式部日記)

※

世の厭はしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて待れば、聖にならむに、懈怠すべうも待らず、ただひたみちにそむきて、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり。(同)

※

心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひ給ふる。それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。(同)

なお、原文の引用は、日本古典文学大系本(岩波)に拠った。

(昭44・9・30稿)